建築展 2008「ふつう」

建築学科　３年　唐沢文茜　担当教員：田中智之

１．プロジェクト趣旨

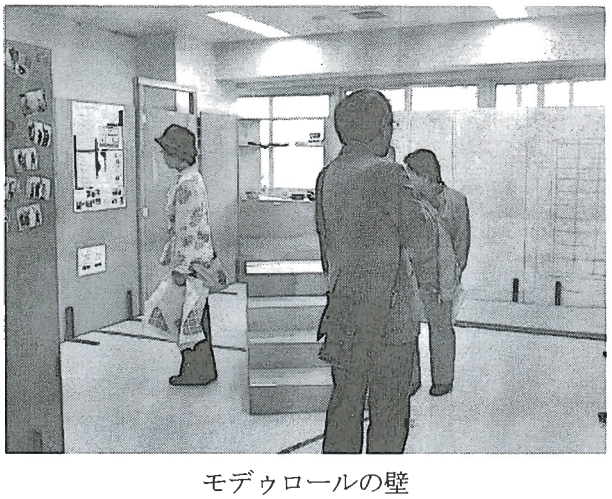
例年、１１月の熊粋祭期間中、熊本大学建築学科３年生が主体となって「建築展」というものを開催している。

今年の建築展は例年のように自分たちの建築の提案をするというよりは、建築を考えたり、つくったりする元となる日常に目を向けた。日常にある「ふつう」なものは、特に変わっていない、自然でとてもピュアなものでそれがなぜ「ふつう」になったのかを調べ、考え、想像し、手でつくる。また、自分たちで新しく創造する。そしてそれを人にわかりやすく、楽しく伝える。これにより、日頃からものを考えられるようになり、設計に活かせるだけでなく、仲間とのコミュニケーション、他人とのコミュニケーションの大事さ、楽しさを学ぶ。

２．企画内容

「ふつう」というテーマをもとに「モデュールの壁」、「ぼくとひみつきち」、「世界一周旅行」、「これからのふつうコンペティション」、「アートポリス」の５つのブースをつくった。

「モデュールの壁」では建築の重要な要素のひとつである「寸法」をテーマとして取り上げ、日本と外国建築の寸法の違いや、ユニバーサルデザインの寸法を実寸で作り、体験してもらった。

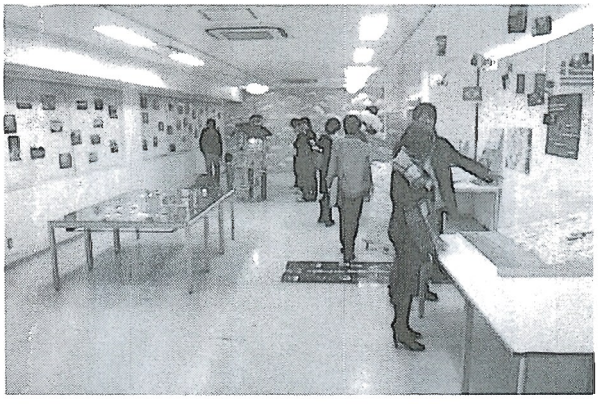


モデゥロールの壁

「ぼくとひみつきち」はひみつきちを通して、子供と私達学生、そして来場して頂いた大人の方々のふつうという概念の違いをかたちにしたものである。この中では幼稚園児のひみつきちの絵を飾った「こどものひみつきち」、来場者が自由に絵を書く「窓の部屋」、私たちで考えた「ふとんの部屋」、そして次のブースへとつなぐ通路として「ペットボトルスペース」があった。

ふとんの部屋

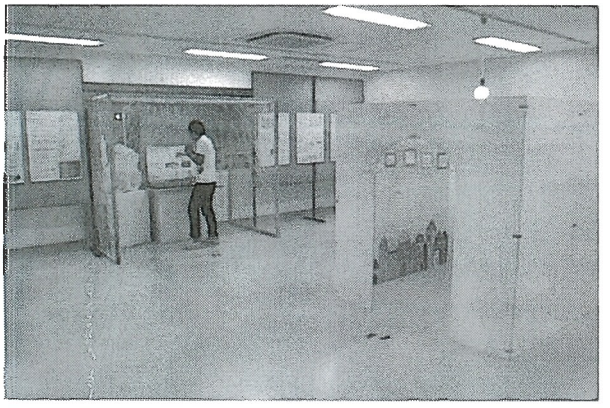
ひみつきちから出ると「世界一周旅行」となる。ここでは地域別に存在する「ふつう」に着目し、いくつかの国の街を模型でつくり展示したり、1/1の模型として東京青山にある「塔の家」や幻想的な「ラピュタ」、そして廃材を使って作ったツリーハウスが会場を賑わせた。また、建築展の宣伝媒体として民族住居であるティピとバハイ・クボの原寸大模型をつくり、校門入口に展示した。



「世界一周旅行」全体様子

「これからのふつうコンペティション」は「これからのふつう」というお題に対して４つの班に分かれて

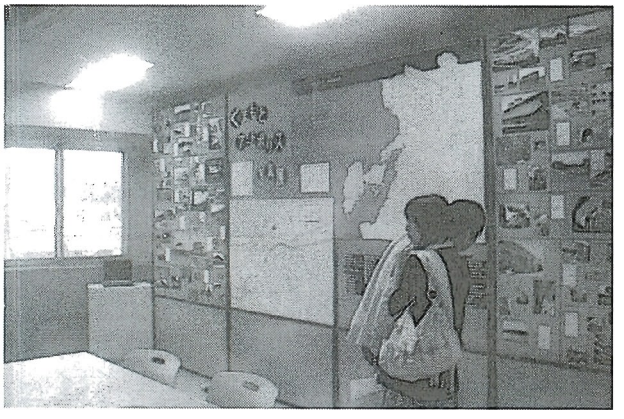
自分たちのアイディアをかたちにした。建築展の際は回遊館という展示ブースをつくり、研究室紹介のパネルと共に４つの案を展示した。



回遊館

最後に会場の出口に「アートポリス」を展示した。これは一般の方々にアートポリスの存在を知ってもらい、もっと建築に興味をもってほしいという目的で、自分たちで撮って来た写真を展示したものである。来場者には、そこで展示を見てもらいながら、アンケートの記入をお願いした。

建築展は３日間を通して、1000人近い来場があり、アンケートは602枚回答があった。来場者からは楽しかった声とそうでないもの、提案など色々な意見を頂いた。



アートポリスの展示

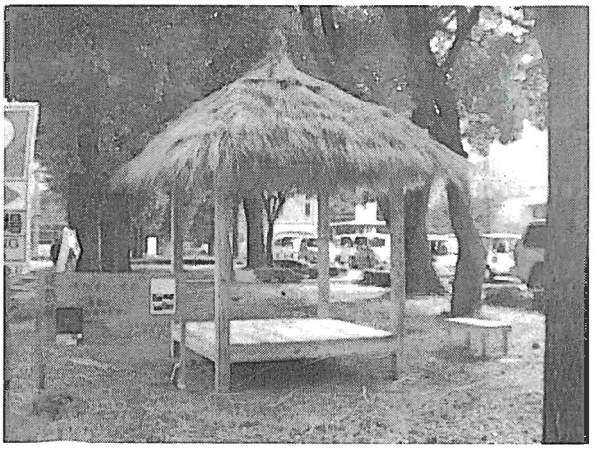
３．予算について

総務2890 大工班131813 広報班98631 ぼくとひみつきち班53934 世界一周建築旅行班113008 モデュールの壁班 10572 これからのふつうコンペティション班 28648 計 439496(：単位はすべて円)という振り分けで使用した。主に木材や模型材料、ペンキなどが中心だった。

４．建築展を終えて

学生だけで企画から運営まで行うことは、なかなか思い通りに行かず、意見が食い違って進まないことも度々あった。テーマを決める議論では、それぞれの主張がある中、まとめていくことが難しく、候補だけでも100以上の提案があった。その中から決まった今回のテーマである「ふつう」は大変難しい問いかけであった。これをどのように捉えて、どのようにしてかたちにしていくか非常に苦労した。しかしプロジェクトが進み、考えがかたちになっていくにつれ、今までの苦労が報われ、大きな充実感に変わっていくのを感じた。みんなで協力し合い、企画から本番までを成し遂げたことは大きな収穫だった。このテーマで私達は様々なことを考えたが、私達の価値観は無限大で、日々変わっていくものであり、今後も考えていかなければならない。この新しい視点を得たことも私達にとって大きな財産になるだろう。自分たちが興味のある自由なテーマでかたちを作り、それに没頭できたことは非常に良い経験となった。この経験を糧としてこれから様々なことに挑戦していきたい。協力して頂いた方々には深く感謝したい。

建築展看板



バハイ・クボ